

学生による自主学習グループ「がん看護学習会」－活動報告－

大原達也¹⁾ 和田琴乃¹⁾ 石井美帆¹⁾ 伊藤むつみ¹⁾ 今井綾美¹⁾ 岩井淳¹⁾ 大串恵¹⁾
小島祐一郎¹⁾ 古俣梓¹⁾ 小松由佳¹⁾ 渡辺純¹⁾ 一柳陽子¹⁾ 今泉郷子¹⁾

要 旨

「がん看護学習会」は、A 短期大学学生有志 11 名とコーディネート教員 2 名によって行った自主学習グループである。参加メンバーそれぞれが抱く“がん看護”への関心を具体的なテーマで発展させ、様々な資源を活用しながら活動を行った。本報では、これらの活動の具体的な内容と、その学習成果である学びを報告する。

キーワード：がん看護、自主学習グループ、学生の学び、主体的学習

I. はじめに

2005 年がんによる死亡者は 32 万 6 千人に上り¹⁾、国民のほぼ 3 人に 1 人はがんで死ぬ時代である。2006 年 6 月に施行されたがん対策基本法は、がん難民と呼ばれる多くのがん患者たちに、よりよい適切な医療が受けられるための「医療の質の均てん化」がその大きな課題となっている。しかし、そのがん医療の中心的役割を担う看護師の基礎教育現場では、がん患者の看護を体系的に学ぶ「がん看護学」として独立した科目を有する教育機関はごく一部の大学に限られている。斎藤らの 2002 年度の調査では、わずか 5 校が独立科目を有していたが、他の多くは成人看護学領域科目に包含されるかたちで構成されており²⁾ 本学も同様の状況にある。また、がん患者の多くが体験する痛みなど様々な症状や苦悩への「緩和ケア」についても、多くの教育機関でその課題を感じていることも報告されている³⁾。

がん看護学は高度な知識と技術体系が求められることから大学院での教育を推奨する声も聞かれるが、入院患者の多くはがん患者であり、がん患者への関わりに困難を抱く臨床看護師の現状などから、筆者も看護基礎教育からの学習の必要性を強く感じている。そんな中、有志学生たちと「がん看護学習会」を立ち上げ、がん看護について共に学ぶ学習活動を行うこととなった。主な活動は約 6 カ月と短いものではあったが、グループメンバーそれぞれが抱く“がん看護”への関心を具体的なテーマで発展させ、様々な資源を活用しながらメンバー一人一人が“がん看護”

について学びを深めていくことにつながっていた⁴⁾。そこで、本報告では、「がん看護学習会」での具体的な活動内容と学習成果としての学びについて報告する。

II. 「がん看護学習会」活動内容と学習成果

1. 参加者概要

A 看護短期大学 2 年生の 11 名(男性 3 名, 女性 8 名)とコーディネート教員 2 名の合計 13 名であった。

2. 「がん看護学習会」の全体構成(表 1)

がん看護学習会の全体構成は表 1 のとおりである。メンバーから挙げられた学習テーマを精選し、ひとつの学習テーマについて月 1 回のペースで学習会を開催した。テーマごとに担当者を中心として、そのテーマについてどのように学ぶか、どのように会を進行するのかということを検討するとともに、事前・事後の準備を重ねながら開催した。各会の学習会を開催した後、その活動内容を学内にポスター展示し、学習内容とその成果を報告した。

3. 各回の活動内容とその成果

以下、各会の活動目的と内容、参加者の学びをその成果として報告する。

1) 第 1 回: 「がんサバイバーシップの現状と看護の課題」について

(1) 目的

がんサバイバーを取りまく諸問題と看護の課題を理解する。

(2) 活動内容

1) 川崎市立看護短期大学

表 1. 「がん看護学習会」活動全体構成

回数	開催月日	学習テーマ／方法
第 1 回	平成 19 年 10 月	「がんサバイバーシップの現状と看護の課題」／ 講演
第 2 回	平成 19 年 11 月	がん体験者による「患者学」／ 講演
第 3 回	平成 20 年 2 月	川崎市立井田病院緩和ケア病棟 ／ 見学実習
第 4 回	平成 20 年 3 月	高度先進医療 - 免疫細胞療法 ／ 講演
第 5 回	平成 20 年 4 月	「ドナルド、マクドナルド、ハウス世田谷」 (小児医療における患者家族支援施設) ／ 見学実習

プレゼンター：今泉 郷子 講師

がんという言葉が持つイメージや偏見をなくすために、がん患者ではなくサバイバー（生存者）という言葉が現在は使うようになってきている。がんサバイバーを取り巻く現状として、治療による身体的、精神的な侵襲が大きいことが紹介された。また、化学療法など治療の開発の進歩、臓器再生医療や iPS 細胞などによる医学的進歩により治療の可能性とともに、倫理的問題も抱えている。また、保険対象外となる最先端医療なども行われるようになり、サバイバーやその家族の経済的負担が大きくなっている。

従来の治療に伴う看護だけでなく、多くの選択肢が選べるようになってきた現在では、患者本人が選ぶことへの負担の重さも指摘されている。看護は、『患者が選択したことを後悔をしない』ようにサポートをしていくために、十分なインフォームドコンセントが行われるような支援が必要である。また、がんになったことでの負い目や、病気であることの困難さだけでなく、今、がんとともに生きていることへの意味を見いだせるような関わりが重要であることが紹介された。

(3) 学んだこと

がん患者に対する概念が、サバイバーへと変化していることの意味を改めて理解することができた。また、医療の進歩により治療の可能性が広がる一方で、倫理的に様々な問題が生じていることや、治療の選択肢の拡がりに伴うインフォームドコンセントとその後のケアなどへの看護の役割が重要であることを理解することができた。さらに、がんとともにある人生への意味の探求という霊的側面への看護援助の重要性を考える機会となった。

2) 第 2 回：がん体験者による「患者学」(写真 1・2)

(1) 目的

がんを体験者の話から、告知された時の気持ちについて、闘病中での様々な苦悩の体験とそれへの対処、現在の生き方、看護師に望むことなどについて学ぶ。

(2) 活動内容

プレゼンター：間瀬 健一 氏

前立腺がんと白血病を克服し、その闘病体験についての著書や医療者への講演経験もある間瀬健一氏を招聘した。事前に間瀬氏の著書や過去の講演会資料を収集し、その内容をもとに講演テーマを絞り込み、より内容の濃い講演となるよう運営を工夫した。

間瀬氏は、告知された時にまず死を考えたこと、世の中に神はいないのか、「何で自分が…」などの思いで希望を感じられず、全てに絶望を感じていた体験を語った。その後の入院日数延べ 1000 日にわたる闘病生活の中で、仕事を失ったこと、年収が半分になったこと、医療費が 1 割自己負担であっても年間 200 万円前後も必要としたこと、治療のために生きるために借金もしたという体験を語った。そして、常に目の前に死があり、それは断末魔の苦しみとなり眠れない日々を送ったこと、しかし“死が最後ではない、魂は生き続ける”という考え方に出会い、はじめて自分の死を受け入れることができたことなどの思いをありのままに語った。また、常に家族の愛の力にも支えられ、助けられたことも繰り返し述べていた。

間瀬氏はその著書の中で「柔らかな心とは、今、存在しているだけですばらしいと感ずることができ

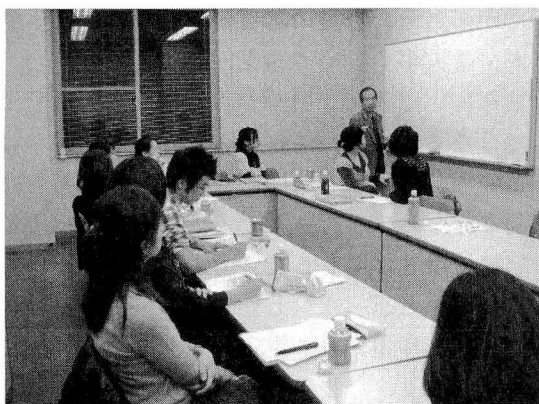


写真 1. 積分を用いて幸せ度を説明する間瀬氏とそれに聞き入るメンバーたち



写真 2. 間瀬氏（前列右 2 人目）を囲んで

る心である」と紹介している⁵⁾。柔らかい心を持つためには、うらみ、つらみ、ねたみ、欲望などを持たないことが必要であること、欲望が少なくなったことで、物欲、地位などの高望みをしなくなり、その日が満足できればよいと思えるようになったという、がんを体験したことでの学び、患者学としての意味を語った。

看護師に期待することとして、自然に接しているだけで安らげることのできる存在の大切さについて語った。患者の多くは人との関わりに飢えているため、人を見抜く能力は高い。ふさわしい声かけはと考えるのではなく、患者についてよく知ること、友人だったらどう接するかと考えることが重要であると、メンバーへの示唆を与えてくれた。

講演会終了後は、魂の存在に関するそれぞれの考えを話し合い、今の生活の中で我々が柔らかい心を持つための極意を伝授してもらうなどの間瀬氏と参加メンバーの交流を深める場を持った。後日、参加メンバー全員の感想を間瀬氏に送り、間瀬氏からも感謝の返事を受けた。

(3) 学んだこと

講演会を通して、メンバーそれぞれが、がんと向

き合うことの困難さや苦しさを身体的、心理的、社会的、霊的それぞれの視点から学び、看護師としてがんに苦しむ人たちに寄り添い、支えていくために必要なことはどのようなことなのかを考える機会となった。さらに、自分自身の人生をいかに生きるべきか、ということについても様々なことを感じ、学ぶこともできた貴重な時間となった。間瀬氏は講演の中で看護師に期待することは「全人格をありのまま出して、自然に接しているだけで患者に安らぎを与えられるような看護師であることであり、そのために必要なことは人格を磨くことだ」と述べていた。人格を磨くということは、優しさや思いやりの心を育てるとか、忍耐力をつけるという要素だけでなく、自らの生きること、死ぬことについて真剣に考え、自分なりの確固とした価値観を持っているということも含まれるのではないかとということも考えさせられた。それができてこそ、死に直面した人の傍に寄り添い、支えとなる看護を実践できるのではないかと感じた。

3) 第 3 回：川崎市立井田病院 緩和ケア病棟見学実習（写真 3・4）



写真 3. 緩和ケア病院 緩和ケア認定看護師 目時陽子さんと



写真 4. 緩和ケア病院 川浪看護師長（前列右 2 人目）とスタッフの方々とともに

(1) 目的

緩和ケア病棟の実際を見学し、一般病棟との設備やケアの違いを知ることと緩和ケア病棟における看護師の患者との関わりについて学ぶ。

(2) 活動内容

緩和ケア病棟への見学実習は、5人と6人の2グループに分かれ、それぞれ半日ずつ2日間にわたって行った。見学実習を行うにあたり、2ヶ月前から見学目的の検討会、緩和ケアに関する文献学習会を数回にわたり重ねた。それらの学習をもとに、見学実習当日には各自の着目したい箇所を持ち寄り実習に参加した。初回メンバーは、おもに緩和ケア病棟の看護師と行動を共にし、入院患者への直接的なケアを見学・参加し、担当看護師や、緩和ケア認定看護師との意見交換会を行った。2回目のメンバーは、季節行事を担当している看護師とひな祭り運営に参加している市民ボランティアの活動に参加した。ひな祭り終了後には、緩和ケア病棟看護師長とボランティアの人々へのインタビューを行った。

緩和ケア病棟の中でも異なる場面を見学・参加することで、少ない時間の中でも多くのことを体験することができた。見学実習後、それぞれのグループの実習内容や質問を通してわかったこと、学んだことを報告しメンバー間で共有した。また、今の自分たちの視点から考える改善が必要なこと、その具体的な改善策についても意見交換をした。これらの学習のまとめを整理し、改善策提案書を緩和ケア病棟に提出した。

これらの活動と緩和ケア病棟との実習の日程や方法などの調整は、参加メンバーである学生が主体で行った。

(3) 学んだこと

緩和ケア病棟での見学実習で学んだことは、「看護の原点」である。看護の原点とは患者を安楽な状態にすることである。たとえば、安楽に眠る・安楽に入浴する・安楽に排泄する・安楽に時を過ごすことである。アロママッサージを見学したとき、このことを強く感じた。そして「痛み」「不快」「不安」を取り除くことが、患者の「生」への意欲を引き出すことにつながり、患者自身が「生きていて良かった」と思えることに、つながるのだと思った。これが看護であり「ケア」なのだった。また、ボランティアの方の話から、「私たちは特別なことはしていない」と言っていた言葉と、緩和ケア病棟看護師長の川浪和子氏からは、「特別なケアでなく、このような

場所だからこそ、看護の本質が問われる、基本的なケアが一番大事」という言葉が深く心に残った。この言葉を聴いて緩和ケアだから特別なことをしているのではなく、患者に「自分らしく生きてもらいたい」という目標を患者に関わる全ての人が持ちながら、基本的なケアを行っている。こういった姿勢は他の病棟で患者と関わる場合でも同じことが言えるのではないかと思った。しかし一般病棟では、日々の多忙な業務に追われ、本質的なケアを行いつらいのが現状であり、今後の自分たちへの課題として受け止めていくとの必要性を学んだ。

また、傾聴するなど理論的に学んだことは頭にはあるものの、いざ現実の場面に直面し死への不安や恐怖を表出されたときに、それを受け止めるのはとても難しく、テクニックを理論的に学んだだけではできないと感じ、人間としての力量や経験が試される場であることを強く実感するとともに、重要な援助の一つであることを再認識した。

4) 第4回：免疫療法について (写真5・6)

(1) 目的

がん治療における高度先進医療としての免疫細胞

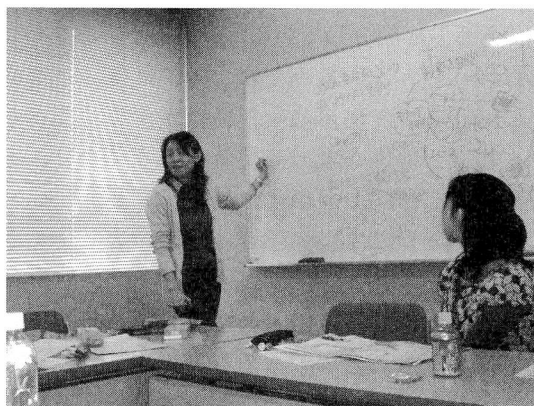


写真5. コミカルなリンパ球を描きながらわかりやすく説明している一柳助手



写真6. 愛らしいリンパ球にメンバーからも思わず笑いが

療法の実際とその看護について学ぶ。

(2) 活動内容

プレゼンター：一柳 陽子 助手

高度先進医療である免疫細胞療法について、治療方法と看護の実際についての講演。

(3) 学んだこと

従来がんの治療は、手術療法・放射線療法・化学療法が中心に行われてきたが、治療技術の進歩に伴い高度先進医療として様々な治療方法が開発されていることを改めて学ぶことができた。今回は免疫細胞療法を中心に学んだが、これは厚生労働省の高度先進医療（127種）の中の1つとして研究が進められており、未知の分野がたくさんあるため今後多くの可能性を秘めていること、たとえばがん末期だとしても治療を望んでいるのならば諦めることはないということも学ぶことができた。また、免疫細胞療法はオーダーメイド治療であるため、自分の細胞を使った治療であるため副作用がなく、どのような病期の人にも行うことができるというメリットがあること、その反面、いまだ十分なエビデンスが示されていないことからその有効性を疑問視する声があること、保険適応外であり高額な治療費が必要になることなどのデメリットがあることを学んだ。免疫細胞療法を受けに来る患者の多くが末期であるという状況から、免疫細胞療法に生きるための最後の望みをかけていること、逆に、経済的な負担から免疫細胞療法の継続をあきらめなくてはならない人もいることなど、様々な問題とそれを支える看護のあり方について学ぶことができた。

5) 第5回：「ドナルド・マクドナルド・ハウス世田谷」 (小児医療における患者家族支援施設) 見学実習 について (写真7・8)

(1) 目的

患者家族の支援について理解を深める。

(2) 活動内容

見学実施日、平成20年4月23日（水）財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンが運営する施設、ドナルド・マクドナルド・ハウス世田谷を見学した。ここは、小児医療において入院患児の保護者・家族が低料金で宿泊できる施設であり、見学当日は、財団事務局統括責任者山本実香子氏より施設の運営体制と利用状況に関する説明を受けるとともに、実際の施設見学を行った。

(3) 学んだこと

乳幼児期、学童期においての入院患児にとって、家族、特に母親ができるだけ多くの時間、患児に付き添うことが治療効果と深く関係している。こうした点から、専門の治療を受けるため遠方から来ている患児の家族が病院の近くに低料金で宿泊できる施設があれば、経済的にも精神的にも負担が軽減され、患児の介護に専念できる。欧米ではこうした民間の支援施設が数多く開設されているが日本ではいまだ5施設のみで、患者家族に対する支援制度は遅れている。見学を通じて患児の治療を支える大きな要素は家族であるということを改めて知り、医療体制の充実を考える上で「患者とその家族」という視点を取り入れていくべきであり、家族に対する具体的支援が必要だと強く感じた。

6) 「がん看護学習会」全体を通して学んだこと

全5回の活動を通して、メンバーそれぞれが学んだことを以下に紹介する。

A：このがん看護勉強会に参加して学んだことは本当に数多くある。間瀬氏の講演ではがん患者としての想いや“生きる”ということに対する考え、緩和ケア病棟見学実習では緩和ケアの実際や一般病棟との違い、免疫細胞療法の勉強会では現在のがん治療



写真7. 患者家族の切実な現状を語る山本氏とそれに聞き入るメンバーたち



写真8. ドナルド・マクドナルド・ハウスにて ドナルドと山本氏（後列中央）とともに

について知ることができた。また“がん看護”に対する考え方や見方も変わり、看護師として大事なことも気付かせてくれるような場となった。

B：この会で活動することで、がん患者の実際の話や緩和ケア病棟での見学実習など、講義からだけでは学べないようなことを学ぶことができた。そして、私自身にとっても私に関わる患者さんにとっても、一日一日悔いが残らないように、また一つ一つの出会いを大切にすることの大切さを改めて学ぶことができた。

C：がん看護学習会に参加してがん患者についての理解が深まった。長年闘病生活を続けている方からの話を聞いたときに「がんになったことで死を間近に感じ、一日一日を大切に生きるようになった。」という言葉が印象深く残っている。この言葉を聞き、患者さんの残りの時間が少しでも充実したものになるように看護していきたいと感じた。

D：この学習会に参加して、がんと闘っている患者やその家族について、患者が求めているものとは何なのかということについて深く考えるようになった。特に間瀬氏のお話は、がんを闘っている患者にとって自分はどのようなことができるのか、また、どうしたいのかということを考えるようになった。この体験をいかして今後の看護に活かしたいと思った。

E：がん看護に対しての「専門性が高く踏み込みにくい領域」というこれまでのイメージを、傾聴・スキップによる不安軽減や、マッサージなどによる疼痛緩和などの基礎的ケアを多く活用した「真の看護領域」としてとらえなおすことができた。また、学生主体で企画・実行する今回の勉強法が、普段の受動的な勉強法よりも有意義で学ぶ質も深いことに気づいた。

F：緩和ケア病棟では、その人らしく過ごせるように疼痛緩和のためにマッサージや食事・トイレでは出来る限り自分で行えるように援助が行われ、ケアだけではなく看護の重要性を感じることができた。これは、緩和ケアのみならず看護全体にとっても必要なことであり、私自身も今後そのような看護を提供していきたい。

G：がん看護学習会に参加したことで、がんの治療は、医学の進歩に伴い、新たな治療法などの様々な可能性があるものであること、それと同時にやはりがんは人の人生を大きく変えるものでもあることを改めて強く感じた。今回、実際にがんを克服した方の話を聞くことや、終末期の患者との関わりから、

がんという疾患についてより深く学ぶことができたのはもちろんのこと、自分自身の生や死を見つめなおすきっかけとなり、それが一番大きかったのではないかと思う。短い期間の活動だったがたくさんの素晴らしいものを得ることができた。

H：学生が主体的に活動を行うことに当初戸惑いがあった。しかし回を重ねる毎に積極的に活動してこうとする気持ちが強くなった。また実際に施設を見学する、がんを克服した人の話を聴くことで、気づきの看護の大切さを改めて学ぶことができた。

I：この学習会は座学よりも体験することがメインの学習会となった。実際にがんを克服した人の話を聞く、緩和ケア病棟で患者さんの様子を見学することにより、がん患者の心の揺れ、不安、そして受容していく過程、看護師の関わり方などについて知識だけでなく、心に残る体験から学ぶことができた。今後、自分がどのような看護を行っていきたいかということについて考えを深めることができた。

J：与えられた課題に対して活動するのではなく、グループメンバーたちで出し合ったテーマから課題を設定し、「何を目的にするのか」「どのような方法で実施するのか」「各自何を学んだのか」など時間をかけて検討して進めたことで、充実感と達成感が得られた。また、活動に対してメンバーの受け止め方、感じ方、学んだ内容の違いに触れ、自分自身の視野や発想を拓けることができ、個人の学びをグループで共有する効果を実感できた。

K：がん看護の勉強会を通して、看護の基本の大切さが改めてわかった。またこれからの自分のやりたいことにもつなげていける部分がありました。がんに対する治療や患者さんの気持など、とらえるのが難しい点も新たに学ぶことができた。

Ⅲ. おわりに

「がん看護学習会」は、現在もお進み中である。講義・実習での体験も重ね、さらにメンバーのがん看護への関心は深化・拡大し続けている。そして、これらの活動を通し“がん看護”に関する知識と理解だけでなく、自分たちの生き方にも考えを深めることにつながっていた。遠藤は、がん患者とその家族への看護では、看護者の自己全体を投じた関わりが必要となり、そのためにも自己に対する知と己を磨くことの努力の不可欠さと、そのための仲間作りの必要性を述べている⁶⁾。このがん看護学習会は、まさにそのような場になっていたのではないかと考え

られる。メンバーは本学を卒業した後、様々な道を歩むこととなるが、新たな場でも全員がさらなる発展を遂げていくことを願っている。

IV. 謝辞

今回のがん看護学習会の活動を行うにあたり、遠方から講演のために来ていただき貴重な闘病体験を聞かせていただいた間瀬健一さん、前川崎市立井田病院看護部副看護部長 佐藤敏子様、同病院緩和ケア病棟主幹 川浪和子様、緩和ケア認定看護師

目時陽子様、緩和ケア病棟看護師およびボランティアの方々、お忙しい業務にもかかわらず丁寧に対応していただいた財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンの財団事務局統括責任者山本実香子様、運営方法など適宜、相談・アドバイスをいただきました川崎市立看護短期大学学長 吉村恵美子先生、同事務局長 添田真郷様、その他多くの方々のご支援・ご協力のおかげで参加メンバー全員が貴重な体験をさせていただくことができました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 癌の統計委員会. がんの統計 '07. 財団法人がん研究振興財団. 2007.
<http://www.fpcr.or.jp/publication/pdf/statistics2007.pdf> <2008.8.12 参照>
- 2) 斎藤亮子, 井上京子他. 看護系4年制大学におけるがん看護学教育の現状と課題. 山形保健医療研究. Vol.112008, p.105-115.
- 3) 清水佐智子. 看護系大学・短期大学における「緩和ケア」教育の課題. 日本がん看護学会誌. Vol.22, 2008, p.100.
- 4) 一柳陽子, 今泉郷子. 自主的学習グループでの学び. 日本看護学教育学会誌. Vol.18, 2008, p.154.
- 5) 間瀬健一. がんは自分で治せ. 海竜社, 1997, 253p.
- 6) 大場正巳, 遠藤恵美子他監修. 新しいがん看護. プレーン出版, 1999, 447p.